

平成26年度文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール（5年間指定）

# 2015 SGH通信

【全体配布用】

No.22 岐阜県立大垣北高等学校SGH推進部

## 海外フィールドワークに行ってきました！ 参加者からのメッセージ集④

### ◇ 企業訪問編 ◇

今回のSGH海外フィールドワークでは、主に「国際ビジネス」「国際開発」分野の学習として、『MUTO TECHNOLOGY HANOI（ムトー精工株式会社のハノイ支社）』『OKB（大垣共立銀行）ホーチミン駐在員事務所』に関する研修を行い、「環境エネルギー（農学）」分野として『株式会社ジャパン・ファームプロダクツ（カンボジア）』を訪問しました。

それぞれの企業から、海外進出の意図や背景、業務内容や課題等についてお話をいただくとともに、工場や農園等を見学しました。

現地で実際に働いてみえる方々の言葉や姿は、インターネットや本などからだけでは得ることのできない大変貴重な経験になりました。

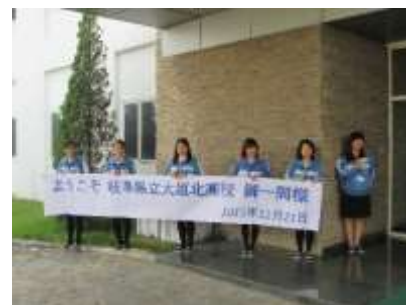
#### 【MUTO TECHNOLOGY HANOI】

「ベトナムは、戦後の日本に似ている。」

これは、私たちが訪れたムトー精工の社長さんの言葉です。当時のベトナムは、内戦直後にもかかわらず、国の再構築に向けて努力している最中でした。そのベトナム人の勤勉さと活気のある街の雰囲気の魅力を感じ、ベトナムをムトー精工の海外拠点先とすることに決めたそうです。

今回、私は「ムトーテクノロジーハノイ」を訪れましたが、その第一印象は、とにかく女性が多いということです。従業員の75%が女性だと聞きました。そのため、産休や育児などに関する補償も充実しており、妊娠している女性従業員には肉体労働をさせず、退社時間を一時間早め、産休を4ヶ月から6ヶ月に伸ばすなど、女性の立場を理解した会社づくりが行われていました。また、半年に一度従業員との意見交換会を開催するなど、安価な労働力と効率性だけを求めて海外進出する企業が多い中で、なんてクリーンな企業なのだろう！と感動しました。その成果もあってか、現地従業員の退職率も他のベトナムの企業に比べて少ないそうです。思わぬところで日本の企業のすばらしさに触れることができました。

（1-1 市川萌奈）



## 【OKB ホーチミン駐在員事務所】

OKB ホーチミン駐在員事務所は大垣共立銀行の海外拠点のひとつで、ベトナムのホーチミン市にあります。一般の銀行とは異なり現金の貸し出しなどの銀行のメイン業務は行いません。主な業務として次の4つが挙げられます。

- ① ベトナムへの進出を計画している日系企業のビジネス全般に関する相談
- ② ベトナムで事業を展開している日系企業への様々な情報提供
- ③ 日本企業が求める条件にあった取引先企業を紹介するなどの企業間の架け橋
- ④ ベトナムの情報を日本の新聞のコラムに記載するなどベトナムに関する情報発信

この事務所は、日本人職員とベトナム人女性の2人で運営されています。銀行のメイン業務を行わない駐在員事務所という存在とその役割を知り、その地域のニーズにあったサービスの提供という点において、とても重要な役割を果たしていることがわかりました。

特に印象に残っていることは、「日本語ができるから日本人の気持ちがわかるとは限らない。言語の壁よりも文化の壁の方が大きい。」という言葉です。異国の地で働くためには、互いの文化の理解なしでは成り立たないことを学びました。

(1-1 説田紘子)



## 【ジャパン・ファームプロダクツ】

今回の訪問で、ジャパン・ファームプロダクツという農業関連の企業を訪問しました。そこでは、「アジアに、安全で安心して食べられる良品質な農作物と食品を」をスローガンとして、現地スタッフと協力し、人とのつながりを大切にしながら農業を行う姿がありました。カンボジアといえば、貧しいながらも農業をしている国という印象が強いかもかもしれませんが、実際に行ってみると農薬や農業大型機械が田舎まで広く普及しており、ジャパン・ファームプロダクツでは大規模なタンクと灌漑設備も使われていました。



私たちの想像をはるかに超えていましたが、カンボジアの土は日本の土よりも粘土質で、乾季は植物の根が張れないくらい固まってしまい、雨季は保水性が高すぎて植物は根腐りしてしまうそうです。そのため、その対策に排水をよくする畑用の用水路を使用しなければならないなど、まだまだ問題がありました。また、カンボジア人の従業員とコミュニケーションを図るときには、言語や習慣、根本的な考え方の違いなど様々な問題もあり、それらを克服するために、何度も同じことを言ったり、根気強くコミュニケーションをとることで対応しているとのことでした。さらに驚いたことに、ジャパン・ファームプロダクツでは「ニホンキュウリ」が生産されていました。近い将来には、「カンボジア産ニホンキュウリ」が食べられるようになるかもしれません。(1-7 井本大貴)